ゲルマニスティクと比較文明　総論

岸田 晩節

序章　国際学会をわが国で開催するにあたって

敗戦後まもなく，1955年ローマでドイツ文学者の国際会議（IVG）[1] が開催されて，わが国からも当時，日本独文学会の会長をしておられた相良守峯（さがら もりお）東大教授（当時）が参加され，さっそく全世界の，しかるべき有資格者とおもわれるゲルマニストたちに入会を勧誘することになったらしく，個人参加の会の性質上のやむをえぬ措置であったとおぼしき，相良先生の貴重な自筆と拝察される筆蹟のあて名書きで，筆者のところにもご案内がとどき，ただちに入会の手続きをとって審査を受け，5年ごとに開催されるその国際学会に入会し，大学・学会での公務多端な身ではあったが，プリンストン（1970年第4回）とバーゼル（1980年第6回）の大会に出席し，それぞれに，ふだん論文や著書を通じてある程度は，かたまっていたはずの学術交流の基礎に，あたかも沃野に慈雨がそそぐように，国内で仕事をしているだけでは得がたい測り知れない新知見の恩恵に浴することができた思い出のかずかずが，走馬燈のように脳裏につぎつぎに思いうかんでくる。

敗戦国ドイツに対する警戒心は，このような研究者集団のなかにおいてすら，きわめてつよく，開催地はローマにつづいてコペンハーゲン，アムステルダム，プリンストン，ケンブリッジ，バーゼルともっぱらドイツ本国をとりまくくにぐに，それも欧米諸国に限定されているようにみえた。このことをおそらくドイツ人のゲルマニストたちは，にがにがしくおもっていたのであろう。敗戦直後から世界のドイツ文学界のみならず文学理論のすべての分野に一世を風靡し，本質的な意味においては今日なおその右に出るものはなく，とおく，ひそかに，わが学問の師と仰ぐWolfgang KAYSER（*Berlin 24. 12. 1906；† Göttingen, Erwaldstr. 77, 23. 1. 1960）[2] の愛（まな）弟子で筆者とも親交のあったGöttingen大学の主任教授のAlbrecht SCHÖNE氏（*Barby/Elbe 17.7.1925-）[10]が筆者に「IVGのNiveau（水準）が問題だ」と語ったことがある。それまでは一回も出席したことのない，そのSCHÖNE教授が突如としてバーゼルの第6回大会に姿をあらわし，しかも次期会長に選任され，1985年にはGöttingenで大会が開催されることになった。国際学会の世界にもある種の政治性の風潮がしのびよってきつつあることを感取し，わたしは，その大会にはあえて出席しなかった。

はたせるかな，のちに，つたえきくところによると，西独の文化政策の風が吹き荒れ，

直前に参加をもうしでた無名のゲルマニストたちにさえ旅費・滞在費をふんだんにふるまい，そういう意味での，たいへんな盛況ぶりだった，という。しかも，もっとおどろいたことには，次期会長に日本のゲルマニストが選任され，1990年には東京で開くことを引きうけてきた，というのである。筆者が1967年以来，学会理事，文科系学会連合常任理事，日本学術会議専門委員として20余年にわたって「ヨーロッパ系言語・文学研究資料情報センター（仮称）」ならびに「ヨーロッパ語系人文・社会研究情報センター（仮称）」設立勧告案策定のためにたずさわってきた研究・推進活動が，国立国会図書館関西館（仮称）設立の気運と表裏をなして，ようやく日の目を見せはじめたかにみえる昨今の情勢ではあるものの，たといこの気運が実を結ぶ方向に展開したとしても，順調に行って最低10年はかかることを覚悟しなければならないのであり，もともと，はなはだしく立ちおくれているわが国の研究体制に多少とも活をいれる効果が出はじめるのには，すくなくともあと15年，つまり21世紀を待たねばならないはずであるのに，３期も４期も時期尚早にすぎるタイミングのわるさをおして，なんの目算があって大会を引きうけてこなければならなかったのであろうか。

第１章　脚下照顧[3]

しかし纜（ともづな）は，すでに解かれているのである。上記のような感懐を禁じえない者が，この事態に立ち向かうための根本姿勢はいかにあるべきか。それは，ほかでもない。上来のべてきた主旨をこめて，まさに，われわれをとりまく現実の脚下をじっくりと見すえ，照顧することから出発するほかないのである。そのような，まさしくゲルマニストであると同時に，いやそれ以前に根本的に日本人であるわれわれ自身のアイデンティティに立脚して，この国土にふかく，ふかく根ざしている，根こそぎの自己を照顧することである。生涯をささえてきたドイツ語学・文学・ゲルマン文化への傾倒によって培われているはずの，よりふかい洞察にさしかけられて，それとあまりにもかけ離れた，異質な「自己」という脚下の赤裸々な真相が見えてくるはずである。これを，あくまでも具体的に点検し，検証する作業を通じて，その作業に照りかえることによって，これとは，あまりにも異質なゲルマン文化の根下にかくされていた真相も見えるともなく見えてくるはずである。

いま具体的にといったが，まさに精神文化の多様をきわめる表層部にのみとらわれることなく（表層部のみを切りとるなら，反訳によってであれ，えてかってな解釈によってであれ，自由に移転することが可能なのである），それらの表層部をして表層部たらしめているところの土台・根っこの部分の彼此それぞれに固有のはたらきに注目しなければならない。表層部はいかにも自由に移転可能であるかに見え，開放的に見えようとも，それを決定的に動かしている土台・根っこの基層部において，われわれは，なんと不自由をきわめ，

なんと融通のきかぬ閉鎖性を露呈してくることであろうか。つまり，われわれの文化を根底において支配し，あやつり，がんじがらめにして閉鎖性の目に見えぬ網にとじこめているものが，われわれの社会であり，制度・統治・機構等のすべての装置群にわたる文・物の系であり，しかもその全体を，ここちよく真綿でくるむように，つつみこんでいる，われわれ固有の生態系から，いやおうなくわれわれの文化のすべての層へと浸透し纏綿してやまないものなのである。この文脈での表層部のみを一般には「文化」と呼び，その基層部を無意識に切りはなして，そういう「文化」を論じるところに，いわゆる「文化論」なるものの限界がみとめられねばならないのであるが，そのような欠落した視点を抜本的に補完するものとして，この文化の基層部と文化の表層部とを打って一丸とする全体が高度化・普遍化・大規模化したものを文明と定義することにする。この主旨は，世界最初の全国学会として1983年12月に，わが国に誕生した「比較文明学会」の，その後の5年間の知的営為の成果［14］に照らして，おおむね承認されうる内容であろう。

第2章　ドイツ語学から比較文明へのアプローチ

前章までに述べたところから明かであるように，「わが国でIVGを開催し，世界の諸文明圏からお客さまをお迎えする」に当って，筆者の立たされた視点は「脚下照顧」ということであったのであり，それは，おのずから，自己の脚下を照顧しつつ，その実践を通じてお客さまがたの諸文明圏の基底へと照りかえることによって，その営みのうちに文明比較の地平がひらけてくるであろう，という洞察にもとづいて本論の表題をかかげるにいたったのである。注の3において，いささかくわしく敷衍したように，脚下照顧の本来の自己は，くしくも中国文明の，さらにはインド文明の精髄と通底していたのであり，この本来の自己こそが，日本文明と中国・インド両文明との文明比較のtertium comparationisでなければならない。このことは虚心に対象を観照することによって対象の中に照りかえり，観察行為において対象と一体になることを努めるためにも，きわめて有効な作業仮説であるといえよう。

詳細は次稿以降に予定する各論において具体的に展開することにして，それへの導入部の役割を総論のかたちで，本稿の根拠となった洞察を裏づける若干の事例をゲルマニスティクの主要分野に求め，それについての所見を本章以下に披瀝することにする。

Es regnet Bindfaden 〈*Bindfäden*〉のわが国における通常の理解は，これについての学会等での公式発表をまったく見かけないので大小さまざまの独和辞典で検証するほかないが，そこで異口同音のようにくりかえされてきている「土砂降り」という訳語は，'GRIMM'［cf. 12］の'REGNEN'の項の'gleichmäßig anhaltender regen'の'bildlich'な用法，という記述から読みとるべき北方ゲルマンの風土のなかで呼吸している'*Bindfaden* 〈*Bindfäden*〉'の比

喩の限界を，かなりはみ出す日本列島南部での大樽をひっくりかえすような集中豪雨的な降り方をも含めた独特の風土の中でのみ育ちえた「土砂降り」というイメージでもって恣意的に置きかえるものであって，'GRIMM'がかかげる引例に明らかな，まさに絵に描いたような誇張の可能性の限度をもはるかに逸脱するものである。むしろ「条条と雨が降りしきる。」という代案を提出する。「条」には元来「ひも」とか「なわ」，「ながい」の意味もある。しかし，この「条」も中国文明からの借物なのだ。ここでも比較文明の課題に逢着する［18］。

*'Stein und Bein'*はよく*'schwören'*と，ついで*'fluchen' 'behaupten', 'streiten', 'klagen'*, 等とともに用いられるが，'GRIMM'［cf. 12］は'STEIN'の項のII，C，2，*b*で「この表現の解明はむずかしいので」としてSp. 2004－2006にわたって，まずBelegeと事実的考証・言語的解釈の諸説とを整序した形であげつつ，Sp. 2005のなかほどではじめてfest, kräftig, hoch und teuerの意味での〈bloßerでなく〉 adv. acc. とする自説で前半の結着をつけ，もののいいかたのsehr hartnäckig und ohne nachgiebigheitをも意味し，また，べつの意味での*st. u. b.* (dat.!) *klagen*の用例をあげたのち，［imp. の用例がおおい］ *st. u. b. frieren*は，これらとはことなる解明を要するとし，［M.］'HEYNE'のacc. des ergebnisses = stein- und knochenhartとする説を，特例にしかあたらぬ，としてしりぞけ，*st. u. b.* を'totes und lebendiges'の意味の主語とする自説を披瀝する。主語として直訳をこころみた『小学館大独和』(1985) には，いちおう軍配をあげたいが，そのあとでカッコをつけて「石も骨も凍る（骨身に徹する）寒さだ」と先行辞典にもどってしまった。しかし，*St. u. B.* は，その順序さえかえられないのだ（'GRIMM', Sp. 2004の上と後述参照)。まして*St.*（＝Totes）をおきざりにし，*B.*(＝Lebendiges)だけにこたえる程度の寒さでよいのか。秋にはもう'Frost'（氷点下の寒気）がおそってくるように（*die ersten Fröste im Herbst*）苛酷な，自然と風土の脅威にさらされながらはぐくまれる民衆の文化の移転不可能な基層部（前章のおわりにのべたように，これをふくめた文化のトータルが高度化・普遍化・大規模化したものを文明と名づけよう)。たとえば支配権力によって拡張しすぎて没落したギリシアとエジプトによるエーゲ海・ヘレニズム文明，ローマとイスラームによる地中海文明，たくましく世界文明たらんとしつつも新大陸のアメリカの援護にもかかわらず，なおも大西洋に後退したかにみえるアングロ・サクソン文明。農耕社会以降の民衆の生業の場が昼であるところでは「昼夜」とか「日夜」，*Tag und Nacht*が自明なように，民衆が狩猟・牧畜を生業としたインド・ゲルマン社会の生業活動では夜を重視することがながく民衆の言語文化に生きつづけて中世ドイツ語では*naht unde tac*が頻出する（『ドイツ文学論攷』第28号1986細谷論文)。この種のことばを逆転させ，とくに前置されているものを抹殺してしまうことは，反訳という移転を契機に，その根幹を抹殺し，むしろ文化と文明の相互理解をはばむ要因となる。

そもそも移転は不可能なのである。ゲーテのいうように「詩作を理解しようと欲する者は，詩の国へゆかねばならぬ」(Noten u. Abhandlungen zu besserem Verständniß des West-östlichen Divansのタイトルページ[33]（本文151ページ参照)。文化の基層部の動かしがたい文明の根，土壌，風土につちかわれるものはその構築物でさえ，その社会習俗を呼吸し，そこにのみはぐくまれることばでたがいに会釈をかわしている。哀惜の念をこめて，ただ，そこで会得しえたものを，できるだけこころにとどめ，つたえるために次善の記述をこころみることはできよう。一案として「Totes 森羅万象［このことば自体，中国文明からの借用であり，その背後にはインド文明の宇宙観がこめられており，他文明の基層にせまるには，借りものの借りものしかもちあわせがない，という側面を日本文明はもっている］(Lebendiges 生きとし生けるものみな）が凍てつくほどの寒さだ」としてみるが，温暖な気候に恵まれ生命にあふれる日本文明につちかわれた日本の文化のなかでの語感としては，(生きとし生けるものみな)を前にもってきたい。日本文明がこの表現をうけいれ，移転しようとするとき，すでにゲルマン語特有の*es*の内実('GRIMM'の'ES'の項参照)がうしなわれ，どうしようもない，*St.*＝Totes［＝森羅万象］の「森羅万象」に，むしろ（生きとし生けるものみな）がつつみこまれ，さらにそれが日本の風土のなかでは，どうしようもなく，きえてゆく*es*の空無にすいこまれてゆくのである。日本文明にとっては，このようなゲルマン文明の基層部に接触しても，それをうつしとる，みずからのことばをもたない。ところがゲルマンの社会では，この*es*にこそ神のように素朴に，勤勉に，苛酷な風土に耐えぬく民衆の赤裸々なたましいのこえそのものがあり，それは，まず*Es friert Stein*とこだまして一つになったのではないか。それが，おそらく中世にはいった時代の民衆のなかの，とあるひとりのうたごころに*und Bein*と押韻をひびかせ，ことばとして全土にはばたくことになったが，宮廷詩人によっては，ながく注目されるよしもなく，Johannes GUTENBERG（1397頃－1468)による印刷術という文明の装置の革命的な発明とあいまってHans SACHS（1494－1576）など，すぐれたおおくの民衆詩人にとりあげられることになったのだ。これがわがくにでは，ながく「俗語」あつかいされてきたが，『郁文堂独和』によってはじめて〈*ugs.*〉として復権したことに，ふかい感銘をおぼえる。われわれの教育・研究の場にも日本文明の存亡がかかっている。学生はキャンパスにいのちのかてをおくる大学の心臓。教育と研究の接点において，文明と文明との対話がかわされるまでに，その現場にいのちがかよわされ，ふかく掘りさげられねばならない。

GRIMM兄弟が民衆のことばに，ふかく耳をかたむけ，話しことばでつたえられてきた民話や伝承をひろく収集したことは知られている。H. PAULは19世紀のゲルマン文献学を集大成した'Grundriß'の最初の3巻[2]（1900－1909？）を一貫する方法論（それを碩学で第3巻「法制史」の筆者Karl von AMIRAが証言している）を述べた第一巻の冒頭で，ゲルマン文献学はいわゆる精神科学ではあるが，探究の対象が精神の領域をこえる場合には，その領

域をこえてどこまでもきわめつくさねばならない，という主旨のことを述べているが［19］，この方法はまさに民衆によってささえられる文化の基層部としての文明の比較研究の現代的課題意識と通底する。さきに述べた'GRIMM'の'STEIN'の項目の担当者は，*stein und bein*という表現がmhd. literaturのどこにも，その'beleg'をみいだすことができず，H. SACHSがはじめてであるとおもわれるから，この表現は，結局，かなり新しいことになる，と事実関係の考証を結んでいる（Sp. 2005の上）。しかし'beleg'というのは書かれた典拠しか意味せず，これのみをもって語られたことば，民衆のこえのすべてが基層部を構成する，ことばの問題に断定をくだすことはできない。

この意味をこめて*Es friert Stein und Bein*という表現についても若干の考察をこころみたわけだが，話しことばの現代標準ドイツ語は共時論的に，オープン システムとしてコード化されはしたが，話しことばを過去にさかのぼって通時的にシステム化し，コード化するにはいたっていない。しかし書きことば・話しことばを通じ，また共時論的・通時論的なことばのとりあつかいを通じて，比較文明の課題意識がおおきくかかわってこざるをえないことを例示したのである。

話しことばにもせまろうとする，いわゆる共時論的言語理論は，'Duden-Grammatik[4]'［35］が第3版いらい追究してきたものであり，データベースの構築によるtoolの駆使もあずかって力があり'Duden-Grammatik[4]'で不可能を可能にする礎石が築かれたといってよいが，それは，いわゆる通時論的方法といたずらに対立し，これをたんに排除するのではなく，書きことばに限定されざるをえなかった独断と偏見から解放して，文明の基層部をささえ，になう民衆の話しことばの実態究明のために通時論的方法をも参画せしめようとするものである，といちおう好意的に理解しておこう。このような立場から，さきの1941年刊の'GRIMM'の'STEIN'の項の執筆者の事実関係の考証における結びの文言は，いずれ書き改められねばならないだろう。

第3章　ドイツ文学を中心に，文学からの比較文明へのアプローチ

ゲーテは最晩年に，ローマでわたしは一番幸福であったという主旨のことをエッカーマンに語っている。ゲーテはこう言った。「ゲットリンク教授[4]があんなに熱心にイタリアの話をする［前日の1828年10月8日，帰国早々に再会したときの話のこと］，その真情が，わたしにはよくわかるのだ。なにしろ，わたしじしんがどういう気持ちでいたか，わすれることができないでいる。まったく，人間らしい人間というものがどういうものか，わたしはローマでしか実感したことがない，といってもいい。このような実感の極限，このような実感をあじわうことができるというほんとうの幸福感を，わたしは，そののち，もう二

度とあじわうことができなかった。そもそもローマでのわたしの境遇とくらべるなら，そののちは，もはや楽しいなどと思ったためしが一度だってなかったのだ。― しかし，もう，淋しい愚痴はやめにしよう」と［...］[20][5] [21]。

ゲーテは1786年の，9月3日にカルロヴィ ヴァーリ（カールスバート）を立ち，ブレンナー峠をこえてヴェローナ・ヴェネツィア経由であこがれのローマに着いたのが2か月たらずのちの10月29日の夕方であった。到着早々の11月1日付の二つ目の手記の冒頭であるが，「わたしはとうとう，この世界の首都にたどりついたのだ！」と抑えきれぬ歓喜をじっくりとかみしめながら，ローマへ行きたいという渇望が途方もなく大きくて，一刻一刻いや増しにつのってくるので，もはやどこにも逗留する気持ちの余裕がなく，ヴェローナ・ヴィチェンツァ・パドヴァ・ヴェネツィアの四つの都市ぐらいは比較的じっくりと観光できはしたものの，ティロールの山々は飛ぶように通りすぎ，フェラーラ・チェント・ボローニァは念をいれて見物するいとまもなく，フィレンツェには3時間しか滞在できないで，ほとんど何も見なかったことを，くやむのではなく，やっとローマについて，いま，じぶんは，たしかにローマにいるのだ，というやすらぎと安堵感がゲーテのこれからの全生涯にわたってしみわたってゆくように思われる，という実感を書きとめている。なぜなら，これまで隅から隅まで知りつくしているつもりであったものが，じつは断片にすぎず，その背後の全体を自分の眼で見ることができるようになったのであるから，おそらくは，まったく新しい人生がこれから始まる，といってよいだろう。わたしの青春の夢が，そっくりそのまま，いまや生々しい現実となって，わたしの眼前にあるのだ，と記すのである［22］。このような感動をこめた手記が2度にわたる長期のローマ滞在をうずめつくしている[6]。かざらない率直な筆致のなかに，42年もののちに，現実に生きてきた全生涯をふまえてのエッカーマンとの対話のことばと，まったく符節を合わせたように，ぴったりと一枚になる内実を看取しなければならない。

ドイツ文学の詩人や作家にとって，それぞれに，なんらかのかたち・意味において，それぞれの「イタリア体験」が必須なものとなったのは，ゲーテの『イタリア紀行』［cf. 22］いらいのことである。まさにドイツ文学史上，空前絶後のエポック メーキングな出来事であったわけである。

ゲーテはまず体験の詩人であった。ゲーテのこころのなかでは，早くからイタリアへの憧憬がよびさまされ，この約束の国が，古代やルネッサンスの芸術の研究がゲーテに，ゲーテの文学に，なにをもたらしたであろうか，ということについての有力な手がかりを上に述べてきた。このイタリア，そしてローマこそが，ゲーテの詩嚢を肥やすのに貢献した第一の領域なのである。

一心に自然と取りくむというゲーテの態度も，彼の幼少の時代にさかのぼるが，しかし当然『イタリア紀行』の随所に，ゲーテの後半生をも支配することになるような，この基

本的態度につらぬかれた手記や観察がちりばめられていることを見逃してはならない。これがゲーテの芸術に糧をもたらしている第二の領域にほかならない。

そしてゲーテの芸術的発展における第三の形成力となっているのがオリエントである。しかし，この第三の形成力を形成力として真に力あるものにしているものこそ第一のイタリア体験であったのであり，この意味においてゲーテのイタリア体験は，ゲーテ文学の偉大さを測定するための，いわばアルキメデス ポイントであることを看過しているところにブールダッハの三分説［23］の限界がある。このブールダッハ批判の根拠の一端を以下に略述する。

ドイツ文学の歴史の決定的な転回点としてのゲーテ文学の偉大さを測定するための，いわばアルキメデス ポイントとしてゲーテのイタリア体験の意義を，かつて東西の研究者がだれも指摘しなかった重要な意味において示唆したのである。その典拠としたエッカーマンの対話のことばは従来まったく看過されたままであったといってよい。しかしさり気なく語られたこの言句そのものに，なによりも当時のゲーテの境涯に立ってはじめて看取できる底の内実がこめられているのであり，途方もなく広大なひろがりをもつ現実のイタリア体験の根底としての底面の上に42年の苦渋な歳月をかけて積み重ねられたいわばBewußseinspyramide（意識のピラミッド）の，リルケ的な意味［cf. 24］において，もはや不可視となった頂点，頂点でありながら，「頂点である」ことにとらわれず，頂点そのものをすら空じて，素朴に，しかしもっとも確しかに，ピラミッドの隅々にゆきわたり，そしてピラミッドのすべてを自在に呼吸している。

このアルキメデス ポイントを計量的側面から一瞥すると，ワイマル版通巻全143巻［cf. 22］のうち第Ⅰ部63巻が評論のたぐいを含む文学作品で，最後の2巻，通計1323ページが索引にあてられている。この索引のなかで「イタリア体験」は様々なキーワードに分けて多元的に検索できるようになっているが，これを中心概念である「ローマ」に限定しても，22ページにおよび，参照指示はほとんどすべての巻にわたっている。これはゲーテの作品にたいするすべてのキーワードのうちの最大の規模のものである。第Ⅱ部通巻全14巻は自然科学論文・手記のたぐいで，4巻に分割されている索引の見出しは科学者名と学術用語が中心であり，第Ⅲ部通巻全16巻は日記で最後の3巻が索引，第Ⅳ部通巻全50巻は書簡で索引は5巻に分割されているが，内容の性質上ゲーテが壮年期以降終生，半世紀以上にわたり，国家枢要の地位にあって親しく仕えたSachsen-Weimar-Eisenach大公国と大公一家にまつわる日常身辺の項目が大きな比重をもつことは，おのずから首肯されることで，第Ⅰ部とは，まったく質を異にする。ただし第Ⅲ部におさめられているフォン シュタイン夫人のために記されたイタリア紀行日記，第Ⅳ部におさめられているイタリアからの書簡は，第Ⅰ部の『イタリア紀行』全3巻に近い分量で，これと表裏一体をなす重要な資料価値をもつものである。

学術情報群を，情報力学的に割りきって，ひとつの台風になぞられるなら，さきのエッカーマン対話のことばは観測可能な台風の眼に相当する。眼を眼そのものとして観測する限り，それは可視的であるには違いないが，眼を可視性の限度においてとらえるかぎり，その意義の重さ，台風のダイナミックスは捨象され，活きて荒れ狂う台風の動性，台風をして台風たらしめている台風の生命ともいうべきものは見うしなわれている。台風の眼においては，かえって可視性のかげにかくれ不可視となっている，可視的即不可視的というほかない核ともいうべきものが，台風の隅から隅まで瀰満している眼に見えない無数の核群と連動して活き，台風としての全体を動かしているのであり，すべての思想の情報群は，このようなWirbel-Kern-Auge, whirl-core-eyeの力動的構造をもつと考えられる。今世紀初頭の偉大な書誌学者であったGeorg SCHNEIDERの，いわゆるGedankenbibliographie（思想の書誌）には，かならずしも，このような情報理論的裏付けはなかったが［25－28］，SCHNEIDERによる19世紀書誌学の集大成の正統な遺産は関連諸基幹科学によって十分に再評価され活かされねばならない。図書館情報学のいわばマクロの数理・統計処理の分野にBibliometrie(bibliometrics文献計量学)があり，そのミクロの応用研究として，Chemical Abstractsなどの大型ゲータベースを統計母集団とするcitation analysis（引用分析）が行われ，収書計画等の実施に利用されたりもしている［cf. 29］。しかし科学者たちの，それぞれに独創性の核をはらんで，その周辺にのみ思想を形成するというscientific activities(科学研究活動)の実相は，上記の考察をぬきにした，うわつらだけに終始する計量測定では，とらえられないものである。もとより計量測定も重要ではある。具体的計量測定なき思想は空疎（leer）である。が，しかし思想の核なき計量測定は盲目（blind）である，といわねばならない（このleer — blindのいいまわしはカントの『純粋理性批判』［30］に由来するtopos)。

本論文の主題ともかかわってくるゲーテのイタリア体験という思想の核にせまるものとして，本質的な意味でドイツ文学を代表して世界文学に組みいれられることになったゲーテの超大作『ファウスト』の冒頭「夜」の一句に問題の焦点をしぼることとしよう。ヴーグナーが退場したあとのファウストの独白の中核をなす部分である。「お前が，お前の父祖から受け継いでもっているものを，つとめ，はげんで本当に自分のものとせよ」［31，cf. 22］。天才ゲーテは突如としてこの世に現われたのではない。ゲーテの由緒ある家柄の生家があり，そこで幼少の時代をおくったFrankfurt a. M. はRhein河とMain河のまじわる物流・情報の基地としてローマ帝国の時代から栄え，郊外の北辺にラテン語でTaunusとよばれる山があり，そこにはLimes(リーメス。ゲルマン民族の侵入にそなえた防壁)が築かれていたが，ローマ軍はゲルマン民族の頑強な抵抗のために，そこからは一歩たりとも北進することができなかった。このような緊迫した軍事対決の場で，なおかつ，Frankfurt市民は，軍事的にはローマ軍の占領下にありながら都市の繁栄を誇ってローマ帝国と対等にわ

たりあい，自主独立の自治権を堅持して今日にいたり，現在は米軍のヨーロッパ最大の基地がある。分断国家の国境の町として板門店をおもいうかべても，想像を絶した天地のちがいである。軍事占領下にあり，また，さまざまな歴史の苦難をかちぬきながら，活力ある市民生活にささえられてローマ帝国から文化遺産をあびるほどに，ゆたかに享受してきた1400年の蓄積がゲーテにとっての「父祖伝来の大いなる遺産」であったのである。にもかかわらず，ゲーテは，それは文化の表層部にすぎず，その基層部を丸ごと，打って一丸とした文明の総体ではないことを洞察していたのであり，ここにゲーテの天才としての資質があった。この欠落を補完するという，やむにやまれぬ内心の衝動につき動かされて，ローマを訪れたのである。天才のみ洞察しうる，まだ見ぬ文明の全体像，天才のみ先駆的に掘り下げることのできる自己の文明の基盤となるべきゆたかな土壌の地平，そこに勃興しつつある新文明の開拓者のみがかわすことのできる，華麗に没落していった旧文明との対話がある。この一点で，江戸文化文政の開花の前夜に書きのこした与謝蕪村の一句にも，日本文明揺籃期の天才的開拓者と，大水軍に護衛された豪華な巨大宝船船団のもたらす交易物資で繁栄を誇りつつ謎の没落をとげた往時の東シナ海文明の覇者高勾麗との対話がよみとれる。「高麗船（こまぶね）のよらで過ぎゆく霞かな」（『第五 折々のうた』[cf. 32, p. 17]の著者大岡信氏は，そこまでは言及していないが）。

しかし，健康な科学精神・西欧啓蒙思想の体現者であったゲーテは，この出会い，対話を洞察とか予感にとじこめておくことに甘んじることができず，じぶんの眼で確かめねばやまなかった。そしてそれを実行したのである。科学者の眼で岩石を，動植物を，人間を，謝肉祭の群衆行動を観察し，図解し，ルポルタージュしたのである。この点に，われわれの文明の先駆者たちと，ゲルマン文明をきりひらこうとするゲーテとの根本的な相違点がある。

ゲーテは東洋の土をふまずしてペルシャの詩法をわがものにし，東洋的遊化三昧の境涯から『西東詩集』を書いた。このゲルマン文明の開拓者にふさわしい独脱無依とも思われる，したがって旧来の西欧文明にひたりきっている読者にとっては，まったく異質としかうつらないおそれのあるこの詩編の読者の「よりよき理解のために」，その本文をはるかうわまわるほどの『注解と論考』を付して，そのタイトル ページに「詩作を理解しようと欲する者は詩の国へゆかねばならぬ。詩人を理解しようとする者は詩人の国へゆかねばならない」[33]というモットーをかかげているのである。みずからは，その土地をふまずしてこれらの詩編を書いた。にもかかわらず，読者には，「その国へ行かねばならぬ」とすすめている。じつに，このことばにこそ，ゲーテの「イタリア体験」のすべての重みがかかっているのである。イタリア体験に先立っていだいたあの洞察と，そしてゲーテ自身が東洋へも行かねばならないと思っているこの洞察，その上に実際にイタリアの，ローマの土をふむことができた時の感動 ― この三つの局面がこの一句では一枚になっているのである。

ブールダッハの三分説の限界はここにある。ゲーテの詩嚢を肥やした第三の領域オリエントも，このようにして，これを根底からささえている第一の領域「イタリア体験」のたまものであったといわねばならない。

第4章　現存する外部の異文明との摩擦　内部に誕生したコンピュータ文明とのつきあい

これまでのべてきた異文明との出会いないし対話の対者は，栄華をきわめつくしながらも，いつしか自己完結をとげて，それぞれに没落して行った文明であった。文明は没落しても文化遺産をのこし，廃墟となった文明の構築物の残骸，手も足ももぎとられながら，なおおもかげを残すトルソーの美のあの「たふとさ」。それを創り出す民族はもはやその土地にはいないにもかかわらず，それらの「美のかたち」は，それらが置かれたまさしくその土地にしかない風土を呼吸して，そのかぎりにおいて，いまもなお，生きつづけているのである。文化の表層部なら，いざしらず，この意味において文明は移転不可能なのであり，これを理解するには，これがうち建てられた，その国へ行かねばならぬのである。

これに反して現存する文明と文明との接触は「喰うか喰われるかの関係」という様相を呈する。それぞれの文明はその基層部においては移転不可能なのであり，しかも，それぞれに独自に自己完結をとげようとして他をはばからぬのであるから，そのかじとりをあやまるならば，当時者の双方にとっての死活の問題となる。今日いたるところに露顕しつつある，いわゆる国際摩擦なるものも，けっして表層にあらわれている現象面での貿易摩擦とか人種摩擦とか，ましてや文化摩擦といった言いかえで解決がつく問題ではない。その根は，きわめて深刻で，政治や経済や文化の統合系の根っこのところで，これをがんじがらめにしてあやつっている基層部をも含めた全体システムとしての文明系の問題なのである。個々の文明を担う個々人がつねに普遍的な人間本来の自己に立ちかえり，虚心に自他を見きわめる洞察を具体的に深めることによってのみ可能な，相互理解への努力と叡知がもとめられるわけである。

最後につけくわえておかねばならぬ重要な課題として，自己の文明のまっただなかに勃興しつつある新文明とのつきあい方という問題がある。そのような新文明として，知識集約型の社会をつくり出しつつある科学文明があるが，この表現は文明論としては，やや，あいまいである。文明とは，その固有の生態系と密接にむすびつつ，みずからがつくりだす社会の制度・文物・構築物とこれを運用する固有の社会的装置群の系を，その根っこのところから丸ごとひっくるめた文化の統合システムのことをいうのである。今日，科学文明のなかで科学を動かしているもっとも強力なシステムこそコンピュータにほかならない。この意味でのコンピュータ文明がわれわれの社会生活のすみずみまで，日常的意識

の眼にはとまらぬところで不気味な浸透力をもって，着実に規制の領域をひろげ，征覇しつつあるのである。巨大科学はもとより，中央・地方の行政統治機構，大・中・小あらゆる規模の産業技術機構，すべての経済・金融機構，さらには大学における人文・社会系のすべての研究・教育機構にまでコンピュータ端末の配置は完了している。この趨勢から落伍した機構はコンピュータ文明の下敷きになって死滅を待つのみである。これは論外として，要は，その次にある。つまり，コンピュータ文明の進路を暴虎憑河，空拳をもって阻止しようとして下敷きになって犬死するという愚策はとらないことにして，これをより有効に飼いならしてゆく，このつき合い方が問題なのである。コンピュータ文明はかつてのいかなる産業革命よりも巨大であり，かつ社会生活への絶大な浸透力をもつものであるから，その進展，浸透の方向・様相を刻々にとらえ切ることは，専門の技術者にとってすら至難のわざである。それは技術者当人にとってすら死活の問題であるから，世界的な規模で技術者相互の横の連携を密にして的確な現状把握のデータを全人類にわかりやすい表現で公開すべきである。

次にこの新文明と共存するかたちで，当分はその役割を強力に堅持しつづけねばならない，ふるき，よき，まことに人間味豊かな旧文明が併存している。問題は，この旧文明が新文明のかげに埋れて，厳然とした存在感がうすれつつある，ということである。新文明との共存下で，しかも旧文明の精髄を毅然と堅持するための教育・研究の根幹が，ひよわになりつつある，という現状である。ひと昔まえまではドイツ文学の受講希望者に「わたしのゲーテの講義を受講したいなら，ゲーテ全集を30回読んでこさせることにしているが，あなたは日本人だから10回でよいことにしよう」(旧制一高の立沢剛教授がFriedrich GUNDOLF [*Darmstadt 20. Juni 1880, † Heidelberg 12. Juli 1931] [cf. 34] から受けた指示)といった指導方針が通らなくなってきたのである。

そこへ登場したのがコンピュータであり，九州大学の樋口忠治教授は逸早く世界最初のトーマス マン（Thomas MANN, 1875－1955）全集全13巻のファイルを完了し，国内大型計算センターを通じ解放することはもとより，ドイツの国立機関であるマンハイムの「ドイツ語研究所」からの要請により，磁気テープを「研究用」に限定して，無料提供した。本学のコンピュータは，まだ大型センターとの接続の経験をまったくもたぬ，ということで，いたしかたなく筆者は検索を同教授自身に電話で依頼したところ，世界一の処理能力をほこる九州大学大型センターの処理システム「シグマ」は，12,000ページの検索をキーワード1件あたり4－5秒以内の高速で処理するということで，翌朝には速達便のハードプリント アウトが届いた。しかも，その結果は理想的であった。その，ごく一部を紹介すると，ドイツ語で「とても」という場合の形容詞原級を修飾する副詞は，ふつうは*sehr*であることは一応分り切ったことだが，*viel*にも「大いに」といった，「とても」に通じる語義があるので，「*viel*を使っては絶対にいけないのか」という問題点にあらかじめ決着をつ

けておくための検索である。しかし問題は，まさに，ここにある。コンピュータに頼りきっていたのではコンピュータは，まともな答えを出してくれない。このキーワードを決定するにさきだって，徹底的に伝統的文献学の成果を，きわめつくしておかねばならない。GRIMM［cf. 12］の'VIEL'関係の項は複合形をあわせるとSp. 105からSp. 251におよび，優に単行本1冊ぐらいの分量にのぼるが，そのII 3)の冒頭で「原級の形容詞の前に副詞の*viel*がつく用法は，両語が独立した形ではもはや使われないが，複合形としては無数にあらわれる。形容詞［原級］の前に*viel*をつける用法は新高ドイツ語ではますますまれになり，そのかわりに*sehr*が用いられる［. . .］」とあり，5)では「形容詞の前の*so viel*はバイヤーン，オーストリアでは形容詞の前の*sehr*と同じ意味に使われる」とし，3)の中程で「書きことばで，特定の*lieb, edel, werth, ehr- und tugendsam*といった，呼びかけのことばのなかで使われる形容詞の前では，一番長きにわたって*viel*が使われてきている［. . .］。たとえば*viel edle jungfrau*（いとやんごとなきお嬢様）」とある。13巻本のFischer版約12,000ページ（流布本だから目録には強いてあげない）検索の結果は，グリムのこの定義を判で押したような稀有な1例であった。それは'Betrachtungen'のVon der Tugendと題する章でマン独自の強烈なアイロニーをこめて，それだけに，いっそう真剣にロマン派をとりあげ，Joseph Freiherr von EICHENDORFF（1788－1857）の'Aus dem Leben eines Taugenichts'（のらくら者の生涯より）の冒頭の部分をマン自身のことばで要約する箇所で，場所は南ドイツかオーストリア。馬車にのったふたりの貴婦人に呼びとめられて「どこへいらっしゃるの」とたずねられ，口から出まかせに*"Nach Wien"*と答えたのが縁で，その馬車にウィーンまでのせてもらい，かくて，いと美しき奥方さま（呼びかけのひびきがこもる）への愛の物語りが始まる（*damit beginnt* ［. . .］ *die Geschichte seiner Liebe zur viel schönen gnäd'gen Frau* ［. . .］）というくだりである（1983年版第378ページ）。この知見にもとづいて，はじめて本学での初歩ドイツ語の指導に誤りなきを期することができた。教育・研究用の端末がいまだに一台も設置されていない本学のようなケースは稀有の例であろう。初歩の語学教育にもコンピュータ検索によらなければならない確認を要する事項が山積しているのである。初歩の語学教育にあたって，学生をまどわさせないために具体的データに基づいた知見をあらかじめ確認する必要を感じて検索した，なお若干の事例をあげてみる。検索の作業は，すべて前記樋口教授をわずらわさねばならなかったもので，この場であらためて**謝意**を表しておきたい。

ドイツ語初歩の段階で学生がとまどうことのひとつに，名詞，形容詞の格語尾，動詞の人称語尾に，一般に「口調上」とか，ひどいケースになると，「つけてもつけなくてもよい」などと，あいまいに説明されることの多い「*-e*をつけるのか，つけないのか」という問題がある。いわゆる*e*-Tilgung, *e*-Erweiterungの問題である。第1例は名詞BriefのDativ（3格）に*-e*をつけるか，という問題である。トーマス マン ファイルの場合，［第］01［巻］202［ペ

ージ］［第］13［行］（以下［　］内を省くので，ケタ数で判読願いたい）の*in einem Briefe*と02 699 37の*in seinem Briefe*の2例があった。（比較のために，3格を示す語尾だけを取り出して*-em Brief*となる，*-e*を省いたケースの検索も依頼すべきであったが，気がひけて断念したことは，くやまれる。第2例は，*sauer*のように，形容詞の，複母音である第1幹母音と語末の第2母音とが，母音同士で重なるケースで，ふつうは，格語尾・比較級の語尾をつけるときには「かならず第2母音の*-e-*を省く」と教えられる。たしかに検索の結果は，格語尾・比較級語尾をつけるときは*saur-*となって第2母音がおちる例が34例あり，おちない例が04 212 2 *Sauere Milch*, 04 233 21 *einem saueren Lächeln*, 06 228 28 *eine sauere Grimasse*, 07 304 14 *das zitronensauere Koffein*の4例にとどまる。だからといって後者の例を否定し去ることはできない。この例のコンテクストをよく調べると，さきの単数Dativの*Briefe*の場合と同様，これらの表現は，たしかに，いずれも「念をおして丁寧に発話されている」のである。とくにマンの4例のうち3例までが，『郁文堂独和』など，学生がかならず使う辞書では，すべて一律に，わざわざ*saure Milch, saures Lächeln, zitronensaure Magnesia*のかたちで出しているので，たちまち齟齬をきたす。「必らず省く」でもなければ「どちらでもよい」でもなく，全人類共通であることばの理にかなった「使いわけ」があることを一応ひとこと説明してやるのが，語学教育の本道ではあるまいか。

'Duden-Grammatik[4]'では「語幹が歯音（*d*あるいは*t*）に終る不規則変化（3基本形で母音が交替する）動詞は直接法・過去形・単数・第2人称において人称語尾*-st*の前に*e*をつける*e*-Erweiterungは古風な，あるいは詩的な言いまわしの特徴と考えられ，標準語では通常*du fandst, du botst*のように*e*のない語形がつかわれる」としている［35，127－128ページ，§209，1.］。'Duden-Grammatik' 第3版の nur in gewählter Sprache（雅語でのみ）とされていた文法記述が，さらに念を押すように第4版では als Zeichen archaischer oder dichterischer Sprache（古風な，あるいは詩的な言いまわし）と改められているのである。nur in gewählter Sprachetで十分「雅語」という意味はつたわるはずだが，これを独和辞典の語義どおりに「上品な，洗練された」としか解することのできない未熟な学生や教師に対する老婆親切からだろうか。それとも意図的に強調しているのだろうか。だとすれば，この記述には問題が生じる。'Duden-Grammatik[4]' の努力に対しては，第2章の終りで，いちおう留保つきながら好意的理解を示したが，にもかかわらず，その記述を全面的に鵜呑みにできるとは思っていない。昨年に筆者が小文でいましめたように眼光紙背に徹する細心精緻の点検・検証をうながす問題の箇所も多いのである［18］。原級形容詞を修飾する*sehr*のかわりにつかわれる*viel*の特殊用法に対するまことに適切な使用例が約12,000ページのなかに，ただの1例あったことを，さきにのべたが，これをもって想定することができるように，トーマス マン自身の文体は一応現代の標準語を代表する作家のひとりである，と考えることができる。にもかかわらず，前記のとおり九州大学の樋口教授に依頼して得た検

索の結果は'Duden-Grammatik⁴' の反証となっているのである。『郁文堂独和』の主要強変化動詞表で，直接法過去基本形が歯音におわるものは29箇あるが，その単数・第２人称で*-st*の人称語尾の前に*e*をつけて*-est*となるトーマス マン ファイルの使用例は約12,000ページ中48例に対し，*e*をつけないで*-st*となっているのは*tatst* １例にすぎないのである。*e*がついて*tatest*となるものは14例であるから，*tun*の過去形の使用頻度の29箇49例に占める割合は29箇の平均値1.69例の8.88倍と相当高い比率になることは，この動詞の性質上，首肯できる。にもかかわらず*-st*になるものが*tatst* １例にすぎず，トーマス マンは詩をほとんど書いていないのであるからこれは'Duden-Grammatik⁴' に対する完全な反証にほかならない。'Duden-Grammatik⁴' が「標準語では通常使う」と推奨している*tatst*の語形が，*tun*の第２人称・過去形使用例全体の15分の１にすぎず，しかも，この使用例はFischer版全集第３巻『魔法の山』の第37頁，第12行目つまり*Von der Taufschale und vom Großvater in zwiefacher Gestalt*（聖盤と二重の姿をした祖父について）と題する第２章の冒頭６ページ目で，やがて８才を迎えようとする少年ハンス カストルプが洗礼をうけた時の話しを祖父が少年に話してきかせたときの，新生児カストルプのふるまいを表現する*das* [*erschrecken, weinen*] *tatst du auch nicht*（怖がったり，泣いたりなんかしなかったんだよ，ほんとに）という，第２人称*du*をつかうケースとしては，むしろきわめて特殊な，極限のsituationでの使用例というべきである。さらに樋口教授が好意でHamburg版全12巻通算約10,000ページのゲーテ全集ファイルを，過去基本形が歯音で終る動詞のうち主要強変化動詞表のはじめの５語に限定して，過去形・単数・第２人称*bandst, batst, brietst, empfandst, fochtst*をキーワードとして検索してくださった結果は，さらに意外な結果をもたらした。すなわちトーマス マンの場合は29語のキーワードについて*tatst* １語のみが*-st*に終っていたのに対し，ゲーテの場合は５語のキーワードにつき（トーマス マンの場合はこれらの使用例が皆無であったのに），*bandst* ５例の*-st*に終る使用例があり，しかも詩集・散文の各巻にまたがっているのである。前述のとおり動詞の性質上*tun*の使用頻度が抜群に高いことが想定されるから，検索を*tatst*を含む29語に拡充すれば，圧倒的多数にのぼることも想定され，*-e-*をつけない*-st*の形が，決して現代の標準語の特徴であるとはいえないことがほぼ確実に認められるであろう。本学で研究用の端末を利用できないので，肝心要なところで，ほぼと言葉をにごさざるをえないことは，いかにも残念である。この検索は，あくまでも樋口教授の好意によるものであって，ご好意に甘えるのは限度がある。本学で端末を自由に使えるなら，目玉の*tatst*をふくむ，他の24のキーワードについても検索をして，この仮説を断定できるところまで追究し，現時点で'Duden-Grammatik⁴' 批判の決め手とすることができたであろう。

終章　日本文明の課題（要旨　Abstract）

2年後の1990年にゲルマニストの国際会議第8回IVGを日本で開催し，共存する世界の諸文明圏からお客さまがたをおむかえするにあたって，筆者がこれに対処するための出発点としたものは脚下照顧ということであり，そこにおよそ文明というものの比較を可能にするtertium comparationisという作業仮説を認め，ゲルマニスティクの言語・文学・文化を中心とする主要分野に既成観念を打破するアルキメデス ポイントとなりうるような発見的事例の一端を枚挙し，紙面の限度内でそれぞれに対して創造的批判を展開してきた。脚下照顧に徹するこのような科学実践にこそ，本稿ではいちおう示唆するにとどめる日本文明の比較文明的課題があると考える。

グーテンベルクの印刷術の発明は数千年にわたって文化の基層部にうもれていた民衆のことばをすくいとるために絶大な偉力を発揮したことは，すでにのべたが，印刷術の革命的といえる発明とともに，ひらかれたあらたな地平は，また民衆のもっとも必要とする知識の解放ということであった。したたかな民衆は自己のもっとも必要とするものが何でなければならぬかをよく知っていた。なによりもまず腐敗したカトリックからの，こころの自由をもとめて聖書を印刷し，そして同時に物質的自由をもとめてユークリッド幾何学の教科書を印刷し，そのいずれもが当時の人類最高の印刷部数を記録して近代産業革命・科学文明への道をひらき今日の西欧文明を確立するための基礎をきずいたのである。まことに印刷術の発明は新文明を創造する装置群を築きあげるための一粒のcornであり，むしろcoreであった，といってよい。ここにゲルマン文明の精髄がある。わが国の国立国会図書館の貸出し用カウンターの壁面をかざる，つぎのヨハネの福音書第8章第32節の一句[36]は，まことに象徴的である。

Η ΑΛΗΘΕΙΑ ΕΛΕΥΘΕΡΩΣΕΙ ΥΜΑΣ

その左に，「真理がわれらを自由にする」という日本語が，ほこらしげにかかげられている。ギリシア語の原文を直訳すれば「真理はあなたがたを自由にするであろう」と未来形になるが，これは日常的な単純な未来ではなく，真理である神がheißenする（いいつける）確言的未来，つまり「必らずや自由にする（であろう）」の意味で，「自由にする」と訳されているのは正しい。さらに聖書のギリシア語では「あなたがた」と第2人称の複数形になっているのに「われら」と訳されているのは，敗戦直後の民主主義の高揚期の，わが国にはじめて勃興した熱い図書館運動のかがやかしい自主独立の自負がうかがわれ，西欧思想の核であるキリスト教の聖書のことばを主体的に奪いとった感がこめられている。当時の国立国会図書館建設事業の龍巻きの中核だったのが中井正一氏で，同氏は館長に擬せられながらも，副館長の職にとどまり，今日から見れば，天寿を全うするということもなく，

比較的若くして世を去ったことが，館の今日の沈滞の運命に陰を落しているようで，惜しまれてならない。

初心なくして成業はおぼつかない。大学問題にしても同断であって，新制といえども，いやしくも大学を建設しようと思うなら，大学院後期博士課程まで，切れ目なしに，年次を追って充実をはかるべきである。大学院のない大学なぞナンセンスである。いたるところにひずみを生じてくる。道なかばにして中断することはあろう。どのように苦しい中断のさなかにあってもたえず初心に立ちかえることである。その初心すらなかった，ということであれば，その集団の後継者に，なんといってわびればいいのであろうか。内憂外患，日本文明がいかに多事多難であるか，その一端をかいまみてきた。T. S. オリエットに「終りが始め」[37] という詩想・トポスがある。本稿を擱筆するにあたり，もういちど，冒頭の第1章を思いうかべていただくようお願いする。脚下照顧 — ここに日本文明の課題があり，さらに課題解決のmethodischer Griff — methodological gripさえあるのである。

注 (Notes)

[1] 現在の正式の名称はInternationale Vereinigung für Germanische Sprach- und Literaturwissenschaft = International Association for Germanic Studiesで，IVGと略されるが，むしろ一般には内容をとった略称でInternationaler Germanisten-Kongreßと呼ばれ，わが国でも「国際ゲルマニスト会議」と略称されてきた経緯がある。

[2] この生没を暗記して覚えておくことは至難のわざである。家族の生年月日をすら，きちっと即座におもい出せるひとはおおくないであろう。だからこそたしかな記述が必要なのである。

カイザーをこころの師と仰ぐひとはおおいことであろう。わが国でも，わたしが教室でしたしく指導した前任大学での門下生たちはすべてこの思いにつながっていることをよく知っている。海外に出かけることがじつに多くなった近年のことである。そのような多忙な旅先で，「こころの師」の墓に詣で，意義ある一日をすごしたいと願うこともあろう。それも生誕の日とか命日に日取りの都合がつけられる，となれば感慨もひとしお。この意味でも，生没年月日をきちっと確かめておくことが，どんなにおおくのひとびとの役にたつことか，このおもいをもこめて活字にするのである。

本稿の文末にかかげる参考**文献**目録は，主として**ISBDs**（**国際標準書誌記述**）シリーズ（そのうちの主なものは［1－3］）に則って相ついで制定された各国の目録規則［4－6］ならびに独立した形態をなさない単行本・逐次刊行物の章・節，寄稿論文，私的メモの類まで記述を可能としたCP（Component Parts）用の，したがって研究者のもっとも必要とする目録規則のガイドライン等［7－9］の線にそい，「論文中での使用例」としては，おそらく世界でも本稿での採用が最初のケースとなるであろう学術情報の国際化のための試行実験の意図をももって記述してある。

謝辞　これらの貴重な文献を，それぞれ筆者が必要とした時期に，きわめてタイムリーにお世話くださった金沢大学図書館司書で日本図書館協会目録委員会委員の永田治樹氏［1－3］，京都大学助教授で同委員の原田勝氏［5］，国立国会図書館付置図書館研究所長で同委員長の丸山昭二郎氏［7］，GMD（ドイツ国立情報処理研究所）東京事務所長のDr. Urlich WATTENBERG氏［8，9］らの永年にわたる友情とご好意にたいして，こころから感謝の意を表明する。

本稿の本文・注をとわず，この**角カッコ**（square brackets, eckige Klammer）の**アラビア数字**は，すべて文末の参考文献番号を示し，必要に応じて，引用箇所のページ等を付記する。上記学術

情報の国際的流通のために，文献目録では漢字は一切（ローマ数字すらも，なるべく）使用せず，**非ヘボン式ローマ字・アラビア数字**に翻字し，必要最少限度の漢字のみ本文・注に記して参照できるようにすることにする。さもなければ通信衛星をつかって世界に流通するはずのネットワークに乗らないのであり，データベース化をすすめている日本独文学会の作成経費におおきくひびいてくるからである。

本注が直接対象とする本文の典拠は，その［10］によった。

この典拠［10］**そのもの**について付記すべき重要なことは，この種のハンドブック，つまり参考図書の類いは欧米の大学図書館等，しかるべき研究機関では完備しなければならない基本文献であり，この原則に貫かれた収書計画・蔵書構成になっているのであるが，わが国ではいまだにこのプリンシプルが根づいていない。この原則を貫くことのできるような有能なライブラリアンがまったく養成されておらず，また各学部要員もこれに理解を示して予算をゆずることもせず，むしろこの惨状をよしとして，「個人装備」として私費で購入すべき類の図書までも，まったく無原則に校費で購入して，あるものはどこでもあるが，大学図書館として必要かくべからざるリフェンス トゥールとよばれる基本的参考文献ですら，ないものは全国どこにもない，といった惨状を呈し，国費と公費のはなはだしいむだづかいによる学術研究体制の基盤の脆弱化を招来している。

その**基本文献の標本**のようなもののひとつのケースが［10］にかかげる重要文献である。本書は東大はもとより京大はじめ全国どこをさがしても見つけることは至難の技であろう。しかもここにしか正確な記述がないのである。なぜわたしが本書を所蔵するかといえば，本叢書は年刊であるから，どの巻をもっていてもよい，あるいは必要とする時に最新の巻を買えば，買いかえる経費を節約することができるという浅はかなさもしい購入心理に左右されやすいのが通弊であるが，大学図書館で完備すべきもののうち，利用価値のもっとも高いと判断されるものは私費を投じて座右におくべきなのである。しからば，なぜもっとも利用価値が高いと判断したかといえば，1931年の第4版以後はすべてその補彙であって30年をへだてた1961年の第9版をまってはじめて生存ドイツ人科学者のすべてを網羅する完全版となり，先行の諸巻に全部あたる必要がなくなったからにほかならない。本巻に収められながら刊行の直前までに死亡した研究者の没年月日と逝去地とは'Nekrolog'に収録されており，カイザーのケースがそれにあたるのである。つまり本書を必要と判断し，わがHandbibliothekに収蔵していなかったとしたら，これらのことを知るよしはまったくなかったわけである。一世代一度の，またとないチャンスであったのであり，同様のチャンスをねらうとすれば1991年まで待たねばならなかったことであろう。

本書の利用価値はたんに学者の生没を調べることにつきるものではさらさらない。ドイツの大学では学位授与のレフェリー制が厳然と定着しているから，研究者として研究活動を行ない，かつ本書の出版者の求めに応じて自己申告を行なった「学者」は所属のいかんをとわず，すべて網羅され，その現住所の町名・番地，所属，職歴，編・著，定期刊行物寄稿論文等にいたるまで手にとるようにわかるBio-Bibliographieの機能を，もっともzweckmäßigにはたしているのである。グリム辞典［cf. 12］には項目ごとの執筆者名は原則として記載されていないが，'TREU', 'TREUE', 'TROST'のじつに見事な出来栄えの項目の筆者が'Urlich PRETZEL'の仕事であることも，本書を通じて確認しえたことのひとつであり，ドイツ本国の全学界の現況が手にとるようにわかり，稗益するところは，はかりしれない。しかしあくまでもこの記事は自己評価・自己申告に基づくものであるから，1948年の化学ノーベル賞受賞者であっても業績の記載がまったくないケース（'Paul MÜLLER'）もある。

このようにして私文庫のために収蔵した図書・資料のたぐいがたまりたまった文字どおり汗牛充棟，2万—3万点と増えつづけ，しかも専門とする主題領域を中心に網羅して重複がない — これが一国一城の主（あるじ）としての主題専門の研究者の**特殊コレクションとしての蔵書**，いわゆる'Handbibliothek'なのであり，そのなかから取り出して利用した一冊のことを「誰それの'Handexemplar'」というのだが — このような研究者や作家等，知的創造にたずさわる人間の実相に対するカイネ ア

ーヌンク（からっきしの無知）をさらけ出して，わが国で生産されつづけ千何百版もの版を重ねる独和辞典においてすらこの2語に対する適訳をまったく見いだせない。'Handexemplar'にいたってはその項目すらない。このような仕事をするひとたちはドイツ語学・ドイツ文学の**基幹科学としての**ゴート語から現代にいたる**ゲルマン文献学**とじっくり取りくむという（カームの『[現代] ドイツ文法』[11] 参照）その仕事の大前提となるべき条件すら満たさぬ暴虎馮河の徒といわざるをえない。いまも孜々としてこの種の作業が進められているもようであるが，せめてひと息ついて，この2語についてはグリムの『ドイツ語辞典』の当該項目と第5巻の序文 [12] の使用例ぐらいには当ってもらいたいものである。ヨーロッパの学術研究機関の現状を知るにも，同様にして入手した，本邦では稀覯本ともいうべき [13] が貴重である。本論文で参考書目に掲載するもののほとんどすべては，このような自助努力の結晶であることを付記する。

3　この禅林固有の概念は「照顧脚下」とも表現され，目的語を動詞のつぎにおくほうが通常の漢文の語法にかなっているようにもおもわれるが，それだけに照顧がかえってその対象としての脚下に限定され，日常的な「お足もとに御注意あそばせ」といった冗語に堕するのがおちである。禅殺にそのような冗語は一切無用である。その真意は，むしろ「脚下照顧」のほうに端的にあらわれており，「脚下」は単なる目的語ではなくして，端的に「脚下照顧」と問うているのであり，その問いに答えうるほどのひとの「脚下」であるならば，その「脚下」は，それ自体が主語となって「照顧」してくるのであり，そこに「照顧」せられる目的語はないのであるから，それは，まさに非対象化せられた空無の主体としての本来の自己でなければならない。「来るなら悟ってこい」，「悟っていないのなら即今，悟る覚悟で来い」であり，『維摩経』の「問疾品第五」にあらわれる文殊師利菩薩ほどの達人には「善来」（よく悟っていらっしゃいました）という歓迎のあいさつのことばともなる。その「善来」といわれる文殊師利の維摩詰に対する病気見舞の来訪の仕方が「不来の相にして来り　不見の相にして見る」[15]のであることは，上述のとおり空無の主体である本来の自己のあらわれによるのである。

この意味における「脚下」は古く『碧巌録』「第1則　武帝問達磨」[16]の（與三十棒　不知脚跟下放大光明）とか豈レ免レ生　荊棘（脚跟下己　深　数丈）とか喚来與　老僧　洗脚。といわれている語句，つまり西暦527年ごろの故事にまでさかのぼるもの。この脚跟下にこそ梁の武帝が達磨大師に「如何是聖諦第一義」と問うて磨が答えた「廓然無聖」の「大光明」が燦然とかがやいているのである。しかるに「對　朕　者　誰」との問いに「不識」と答えられ，面くらっているあいだに江のかなた北魏に見失った帝が「此是観音大士傳　佛心印」なることを知らされて悔い，使いをつかわすが闔国去。佗亦不レ回。国をあげて追っても彼は帰ってこぬであろう。脚下を照顧せずして他に求めても，どこにも達磨はいないのだ。脚跟下に放つ大光明，そこにこそ，求める達磨の正体「廓然無聖」の当体があるのであり，それが空無の主体としての本来の自己にほかならない。この省察をうながしてくださったのはFAS久松真一先生門下の高足，花園大学の常盤義伸教授で，国際的に評価の高い多くのお仕事のうち [17] の一点を記して**謝辞**にかえる。

4　Karl Wilhelm GÖTTLING（1798－1869）　薬学・化学者で1789年からJena大学で哲学科，化学・薬学科の教授をつとめ，ゲーテとも交友があったJohann Friedrich August（1755－1809）の息子で，[古典] 文献学・考古学者。Rudolstadtでギムナジウム教授，Neuwiedでギムナジウム校長をつとめ，1822年からJena大学で哲学科の教授，図書館長をつとめた。ギリシア語があまり得意でなかったゲーテをたすけてエウリピデスのファエトンなどを翻訳して提供し（1821年10月25日付のゲーテの日記），「この冬じゅうエウリピデスを手離さないだろう」と10年以上もたった1831年11月23日付のツェルターあての手紙で，ゲーテはのべている。またゲーテの詩 'Die neue Sirene'（新しいセイレーン）をギリシア語に訳してゲーテに提供したり，letzter Hand 版の全集の校訂を手伝うなど，ゲーテにとって身近かな存在だった。

5　高橋義孝氏の監修・訳 [21] もあるが，この対話はきわめて重要であるので，拙訳では，とくにゲーテの真意を汲みとる工夫をこらした。先師大山定一先生が言及されたことを門下生一同と

ともに追憶し，記念のしるしとする。

[6] [22] に示すように，ワイマル版では2度にわたるゲーテのローマ滞在時の手記が計487ページにわたり第1次滞在の分は1786年11月1日付から87年2月21日付まで，第2次の分は1787年6月8日付から88年4月14日付まで，前者はすべて日付のある手記であるのに対し，ページ数にして5，6倍の後者は日付のある書信のほかに日付のない，あるいは明確でない報告・論考体の文章がかなり織りこまれている。

[7] **謝辞**　ゲーテに言及するに当って先師をともに追憶し，筆者の古い記憶を客観的な資料と照合するのに必要とする様々な情報を提供していただいた京都大学芦津丈夫教授に感謝の意を表する。

Literature（文　献）

[1] ISBD (M) — International standard bibliographic description for monographic publications / International Federation of Library Associations. — 1st standard ed. — London : IFLA Committee on Cataloguing, 1974. — x, 36 p. ; 30 cm. — Preliminary ed.: 1971. — ISBN 0-903043-02-5 (pbk.)

[2] ISBD (S) — International standard bibliographic description for serials / recommended by the Joint Working Group on the International standard bibliographic description for serials set up by the IFLA Committee on Cataloguing and the IFLA Committee on Serial Publications. — London : IFLA Committee on Cataloguing, 1974. — x, 36 p. ; 30 cm. — ISBN 0-903043-03-3 (pbk.)

[3] ISBD (A) — International standard bibliographic description for older printed monographic publications : a draft / recommended by the IFLA Working Group on ISBD (A) for the description of older monographic publications. — London : IFLA International Office for UBC, 20 Nov. 1978. — 60 typewritten p.

[4] Anglo-American cataloguing rules : second edition / ed. by Michael GORMAN : Paul W. WINKLER. — London : The Library Association, 1978. — [637] p. ; 25 cm. — ISBN 0-85365-681-9 (cbd.). — ISBN 0-85365-691-6 (pbk.). — ISBN 0-8398-3210X (cbd.). — ISBN 0-8389-3211-8 (pbk.). — ISBN 0-88802-121-6 (cbd.). — ISBN 0-88802-122-4 (pbk.)

[5] Regeln für die alphabetische Katalogisierung : RAK / hrsg. von d. Kommission d. Dt. Bibliotheksinst. für Alphabet. Katalogisierung unter Vorsitz von Franz Georg KALTWASSER. — Autoris. Ausg. — Wiesbaden : Reichert. — 6 Bde. — Bd. 1: Regeln für wissenschaftliche Bibliotheken : RAK-WB / red. Bearb. u. Register: Irmgard BOUVIER. — 1983.— [405] S. ; 30 cm. — ISBN 3-88226-165-X (kart.). — ISBN 3-88226-166-8 (geb.). — Bd. 2: Regeln für öffentliche Bibliotheken : RAK-ÖB. — Bd. 3: Sonderregeln für Musikalien und Musiktonträger : RAK-Musik. — Bd. 4: Sonderregeln für kartographische Materialien : RAK-Karten. Bd. 5: Sonderregeln für AV-Materialien : RAK-AV. — Bd. 6: Sonderregeln für die Ansetzung der Namen von Personen aus Staaten mit außereuropäischen Sprachen. Dazugehörige Transliterationstabellen für die Umschrift nicht lateinischer Schriften. Vorabdrucke von Bd. 3—6: sind zu beziehen über das Dt. Bibliotheksinst., Bundesallee 184/185, D 1000 Berlin 31. — Außerdem: ist eine Beispielsammlung geplant.

[6] Nihon mokuroku kisoku : 1987 nen ban / Nihon Tosyokan Kyôkai Mokuroku Iinkai = Nippon Cataloging Rules : 1987 edition [NCR 1987] / prepared by the Committee of Cataloging of the Japan Library Association. — Dai 1 satu. — Tokyo : Nihon Tosyokan Kyôkai ; Japan Library Association, 1987. 9. 21. — [335] p. ; 26 cm. — (JLA ; 8720). —

ISBN 4-8204-8708-6 c300 : ¥3000E

[7] Guidelines for the application of the ISBDs to the description of Component Parts / approved by the Standing Commitees of the IFLA (International Federation of Library Associations and Institutions) Section on Cataloguing and the IFLA Section of Serial Publications. — London : IFLA UBCIM (Universal Bibliographic Control and International MARC) Programme, 1988. — [30] p. ; 30 cm. — ISBN 0-903043-50-5

[8] INIS : Descriptive cataloguing rules / G. Del BIGIO ; C. M. GOTTSCHALK ; H. W. GROENEWEGEN ; E. RUCKENBAUER. — Vienna : IAEA (International Atomic Energy Agency), March (printed April) 1980. — 73b p. ; 30 cm — (IAEA-INIS-1 ; Rev.5) — Note: This replaces the previsions of this document. — INIS: the International Nucleal Information System. — ISBN 92-0-178180-6 : öS60.— [$4.00]

[9] INIS : Descriptive cataloguing samples. — Vienna : IAEA, Febr. 1978. — 53 p. ; 30 cm. — (IAEA-INIS-2 ; Rev. 3). — ISBN 92-0-178278-0 : $3.00 [öS45.—]. — Note: This replaces the previsions of this document. — Stocks of the following INIS Reference Series and Forms: also available in April 1980: IAEA-INIS-3 (Rev. 5), 4 (Rev. 1), 5 (Rev. 3), 6 (Rev. 13), 7 (Rev. 1), 8 (Rev. 1), 9 (Rev. 3), 10 (Rev. 1), 11 (Rev. 8), 12 (Rev. 2), 13 (Rev. 18), 13 (Rev. 15) (F), 13 (Rev. 10) (D), 14 (Rev. 1), 15 (Rev. 0), 16 (Rev. 0), 17 (Rev. 1), 18 (Rev. 0); INIS Form 1 (Rev. 5), 3 (Rev. 0). — Note: further revisions will be issued in 1980.

[10] Kürschners deutscher Gelehrten-Kalender : 1961 / hrsg. von Werner SCHUDER. — 9. Ausg. — Berlin : Walter de Gruyter, 1961. — 2 Bde. ; [2582] S. ; 21 cm. — Bd. 1: A—N ; Bd. 2: O—Z, Nekrolog, Festkalender (50., 60., 70., 75., 80., 85., 90., 100. Geburtstage), Register der Gelehrten nach (Hauptarbeits-)Fachgebieten, Wissenschaftliche Verlage

[11] A grammar of the German language / by George O. CURME. — 2nd rev. ed. — New York : Frederick Unger Publishing, 8. printing 1960. — [635] p. ; 27 cm

[12] Deutsches Wörterbuch / von Jacob u. Wilhem GRIMM. — Nachdruck der ersten Ausgaben 1854—1971. — München : Dt. Taschenbuch Verlag, 1984. — 17 Bde. in 33 Teilbänden ; 24 cm. — (dtv ; 5945). — ISBN 3-423-05945-1. — Bd. 5 = Bd. 4, Abt. 1, Teil 2. Gefoppe — Getreibs / bearb. von Rudolf HILDEBRAND ; Hermann WUNDERLICH. — Fotomechan. Nachdr. d. Erstausg. 1897. — 1984. — Vorwort: III f. — Textteil: Sp. 2153—4452

[13] Minerva : Jahrbuch der gelehrten Welt / hrsg. von Werner SCHUDER. — Abteilung Universitäten und Fachhochschulen. — Bd. 1 : Europa. — Jg. 35. — Berlin : Walter de Gruyter, 1966. — [1704] S. ; 21 cm

[14] Hikaku bunmei / Hikaku Bunmei Gakkai = Comparative civilization / The Japan Society for the Comparative Study of Civilizations. — Tokyo : Tôsui Syobô. — 21 cm. — No. 1: Tokusyû : Hikaku bunmei no tihei = Special issue : The horizon on the comparative study of civilizations. — 1985. 11. 19. — [217] p. — Syoseki kôdo 3320-800070-5381. — 3320-800069-5381 (on the cover). — No. 2: Tokusyû : Nihon bunmei no kaimei = Special issue : Some elucidation of Japanese civilization. — 1986. 10. 30. — 228 p. — Syoseki kôdo 3320-800081-5381. — No. 3: Tokusyû : Kagaku bunmei to syûkyô bunmei = Special issue : Scientific civilization and religious civilization. — 1987. 10. 20. — 218 p. — Syoseki kôdo 3320-800085-5381. — ISSN 0912-2087

[15] YUIMA 7 soku. // Kyôroku syô / HISAMATU Sin'iti — Tokyo : Risôsya, 1973. — 548 p. : 21 ill. ; 22 cm. — (HISAMATU Sin'iti tyosaku syû / HISAMATU Sin'iti ; 6). — p. 150—162.

[16] Dai 1 soku : BUTEI DARUMA wo tou. // Hekigan syû hisyô / SETTYÔ Ken Osyô zyu ; ENGO Zenzi hyôsyô ; HAKUIN Zenzi teisyô ; NAGATA Haruo hen. — Tokyo : Seiko Zassi Sya, 1916. — [916] p. : 1 ill. ; 23 cm. — p. 1—17 [= 16—32].

[17] A dialogue on the contemplation—extinguished : a translation based on Professor YANAGIDA Seizan's modern Japanese translation and consultations with Professor IRIYA Yositaka / translated by TOKIWA Gisin. — [Kyoto] : The Institute for Zen Studies, 1973. // Zekkan ron : eibun yaku, tyû ; genbun kôtei ; kokuyaku / Tyûgoku Zenroku Kenkyû Han ; TOKIWA Gisin ; YANAGIDA Seizan. — Kyoto : Zenbunka Kenkyûsyo, 1976. — [186] p. : 79 ill. ; 27 cm. — (Kenkyû Hôkoku ; Syôwa 51 nen). — p. [i] — 34 [36 p.]

[18] 'MIYOSI-', 'DUDEN-bunpô' to 'Ikubundô-dokuwa-', 'GRIMM-ziten' / KISIDA Bansetu. // Brunnen. — Tokyo : Ikubundô Verlag, Sept. 1987. — 19 cm. — Nr. 296, p. 12—15.

[19] Grunfriß der germanischen Philologie / hrsg. von Hermann PAUL ; unter Mitwirkung von K. von AMIRA, W. ARNDT, O. BEHAGHEL, D. BEHRENS, H. BLOCH, A. BRANDL, O. BREMER, B. ten BRINK, W. BRUCKNER, E. EINENKEL, V. GUDMUNDSSON, H. JELLINGHAUS, K. Th. von INAMA-STERNEGG, Kr. KALUND, Fr. KAUFFMANN, F. KLUGE, R. KOEGEL, R. von LILIENCRON, K. LUICK, A. LUNDELL, J. MEIER, E. MOGK, A. NOREEN, J. SCHIPPER, H. SCHÜCK, A SCHULTZ, Th. SIEBS, E. SIEVERS, W. STREITBERG, B. SYMONS, F. VOGT, Ph. WEGENER, J. te WINKEL, J. WRIGHT. — 2., verb. und verm. Aufl. — Straßburg : Trübner, 1900 bis [1909?] — 3 Bde. ; 25 cm. — 3. Aufl.: Berlin : de Gruyter, 1911—
Bd. 1: 1901. — xx, 1621 S. : mit einer Runentafel und 3 Karten ; in Halbfranz geb. ; die einzelnen Lieferungen des Bandes 1896—1901
Begriff und Geschichte der germanischen Philologie ; Methodenlehre ; Schriftkunde ; Sprachgeschichte ; Namen-, Sach- und Wortverzeichnis
Bd. 2: 1. Abt. — 1901—[1909?]. — 5 [6?] Lfgn. [S. 1—1134+?]
Literaturgeschichte
Bd. 2: 2. Abt. — 1905. — 259 S. ; in Halbfranz geb.
Metrik
Bd. 3: 1900. — xvii, 995 S. : mit 6 Karten ; in Halbfranz geb.
Wirtschaft ; Rechte ; Kriegswesen ; Mythologie ; Sitte ; Kunst ; Heldensage ; Ethnographie ; Sachregister

[20] Ich kann es dem Guten nicht verargen, sagte Goethe, daß er von Italien mit solcher Begeisterung redet; weiß ich doch, wie mir selber zumute gewesen ist! Ja ich kann sagen, daß ich nur in Rom empfunden habe, was eigentlich ein Mensch sei. Zu dieser Höhe, zu diesem Glück der Empfindung bin ich später nie wieder gekommen; ich bin, mit meinem Zustande in Rom verglichen, eigentlich nachher nie wieder froh geworden. — Doch wir wollen uns nicht melancholischen Betrachtungen hingeben [. . .]. // GOETHES Gespräche : Gesamtausgabe / begründet von Woldemar Frhr. von BIEDERMANN ; neu hrsg. von Flodoard Frhr. von BIEDERMANN ; unter Mitwirkung von Max MORRIS, Hans Gerhard GRÄF, Leonhard L. MACKALL. — Leipzig : F. W. v. Biedermann. — 4 Bde ; 21 cm. — Bd. 4: Vom Tode Karl Augusts bis zum Ende (=Juni 1828—März 1832). — 1910. — S. 30.

[21] GÊTE taiwa roku = GOETHES Gespräche / hrsg. von F. Frhr. von BIEDERMANN ; KUNIMATU Kôzi [hoka] yaku. — Dai 4 kan: TAKAHASI Yositaka [kansyû] yaku. — Tokyo : Hakusuisya, 1968. — 546 p. ; 22 cm

[22] Werke / Johann Wolfgang von GOEHTE ; hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. — Weimar : Hermann Böhlaus Nachfolger, 1877—1919. — 133 Bde in 143 Teilbänden ; 19 cm. — Abt. 1, Bd. 30: Italienische Reise 1. — 1903. — Rom: S. 195—279, 293—295. — Bd. 32: Italienische Reise 3. — 1906. — Zweiter Römischer Aufenthalt vom Juni 1787 bis April 1788: S. 1—338, 369—429. — GOETHE, Joh. Wolfg. von: *28. August 1749 Frankfurt a. M., † 22. März 1832 Weimar

[23] GOETHES west-östlicher Divan in biographischer und zeitgeschichtlicher Beleuchtung : Weimarer Festvortrag 1896 / Konrad BURDACH. // Vorspiel : Gesammelte Schriften zur Geschichte des deutschen Geistes / Konrad BURDACH — Halle / Saale : Max Niemeyer, 1926. — 2 Bde ; 24 cm. — Bd. 2: GOETHE und sein Zeitalter. — [597] S. — S. 282—324. — Insbes.: S. 282. — Exkurs über den Schluß des 'Schwagers Kronos' und den Ausgang des Urfaust (ungedruckt): S. 324—332. — Hauptteil zuerst in: GOETHE-Jahrbuch. — Bd. 17 (1896), S. 3—40.

[24] [RILKES Brief] An Nora PURTSCHER-WYDENBRUCK, [vom] 11. August 1924. // Briefe aus Muzot : 1921 bis 1926 / Rainer Maria RILKE ; hrsg. von Ruth SIEBER-RILKE, Carl SIEBER. — Leipzig : Insel-Verlag, 1937. — 451 S. ; 19 cm. — S. 288—295. — Insbes.: S. 291 f.

[25] Handbuch der Bibliographie / Georg SCHNEIDER. — 4., gänzl. veränderte und stark verm. Aufl. — Leipzig : Hiersemann, 1930. — ix, 673 S.

[26] Einführung in die Bibliographie / Georg SCHNEIDER. — Leipzig : Hiersemann, 1936. — viii, 203 S.

[27] Theory and history of bibliography / Georg SCHNEIDER ; translated by Ralph Robert SHAW. — New York : Columbia Univ. Press, c1934 ; The Scarecrow Press, renewed c1961, by Ralph R. SHAW — xiv, 293 p. — p. 295—: Index

[28] Ergebnisse und Fortschritte der Bibliographie in Deutschland seit d. ersten Weltkrieg / Joris VORSTIUS. — Leipzig : Harrassowitz, 1948. — V, 172 S. — (Beiheft zum Zbl. für Bibl.-Wesen ; 74)

[29] Lexikon des Bibliothekswesens / hrsg. von Horst KUNZE ; Gottard RÜCKL unter Mitarbeit von Hans RIEDEL, Margit WILLE. — 2., neubearb. Aufl. (5.—14. Tsd.). — Leipzig : VEB Bibliographisches Institut, 1974. — 2 Bde ; 24 cm. — 1. Aufl.: 1969 (1.—4. Tsd.)

[30] Gedanken ohne Inhalt sind leer, Anschauungen ohne Begriffe sind blind. // Kritik der reinen Vernunft / Immanuel KANT ; nach der 1. und 2. Original-Ausgabe neu hrsg. von Raymund SCHMIDT. — 2., durchgesehene um ein Namenregister vermehrte Auflage [privater Nachdr.] — Riga : Johannes Friedrich Hartknoch, 1787. — [794] S. ; 19 cm. — S. 61—650: I. Transzendentale Elementarlehre. — S. 94—650: Zweiter Teil : Die transzendentale Logik. — S. 94—105: Einleitung : Idee einer transzendentalen Logik. — S. 94—98: I. Von der Logik überhaupt. — Insbes.: S. 95, Z. 16 f.

[31] Was du ererbt von deinen Vätern hast Erwirb es um es zu besitzen. // Weimarer Ausg. [cf. 22], Abt. 1, Bd. 14, S. 39, V. 682 f.

[32] Dai 5 Oriori no uta / ÔOKA Makoto. — Tokyo : Iwanami Syoten, 1986. — 220 p. ; 18 cm. — (Iwanami Sinsyo ; 333). — p. 17

[33] Wer das Dichten will verstehen Muß in's Land der Dichtung gehen; Wer den Dichter will verstehen Muß in Dichters Land gehen. // Weimarer Ausg. [cf. 22], Abt. 1, Bd. 7 : Noten und Abhandlungen zu besserem Verständniß des West-östlichen Divans. — S. 1.

[34] Friedrich GUNDOLF zum 100. Geburtstag : Festakt der Heidelberger Universität am 7. Juni 1980 / Claus Victor BOCK. // Castrvm [Castrum] Peregrini / Herausgeber und Schriftleitung: M. R. GOLDSCHMIDT ; Beirat: Claus Victor BOCK (London), Karlhans KLUNCKER (Bonn), C. M. STIBBE (Rom).— Amsterdam : Stichting Castrvm Peregrini. — 24 cm. — Die Hefte erscheinen: in zwangloser Folge fünfmal jährlich im Gesamtumfang von ca. 400 Seiten. — ISSN 0008-7556 : HFL/DM 67,— (Im Abonnement werden die Hefte in einer numerierten Aufl. geliefert). — Jg. 30 (1981), H. 148—149, S. 5—17. — Castrvm Peregrini: wurde 1950 unter der Patenschaft von Carl August KLEIN †, Wilhelm FRAENGER † und Lothar HELBING begründet von J. E. Zeylmans van EMMICHOVEN. — Das Handexemplar des Verf.s: trägt die Nummer 357.

[35] Duden : Grammatik der deutschen Gegenwartssprache / hrsg. und bearb. von Günter [!] DROSDOWSKI in Zusammenarbeit mit Gerhard AUGUST. . . [Autoren: Max MANGOLD. . .] . — 4., völlig neu bearb. u. erw. Aufl. — Mannheim ; Wien ; Zürich : Bibliographisches Institut, 1984. — 804 S. ; 20 cm. — (Der Duden in 10 Bänden ; Bd. 4). — Günter [!]: So auf dem Titelblatt von dem Handexemplar des Verf.s [= Günther]. ISBN 3-411-20904-6

[36] Hê kainê diathêkê = Genten sinyaku seisyo = Novum testamentum Graece / curavit Eberhard NESTLE ; NAGASAKI Zirô hensan, hakkô. — Tokyo : Nagasaki Syoten (reprinting), 1942. 8. 20. — [676] p. ; 16 cm. — Bunkyô kaiin bangô 121002 : ¥3.50. — p. 257

[37] East Corker : 1940 / by T[homas] S[tearns] ELIOT. // Ausgewählte Gedichte : Englisch und Deutsch. / T. S. ELIOT ; übertragen von Ernst Robert CURTIUS [u. a.]. — Frankfurt a. M. : Suhrkamp Verlag, 1951. — 149 S. ; 22 cm. — Vier Quartette = Four Quartets / übertragen von Nora [PURTSCHER-]WYDENBRUCK: S. 83—149. — S. 98—113. — Die deutschsprachigen Rechte der »Four Quartets«: sind im Besitz des Amandus Verlages, Wien.

Tyosya ni yoru CIP dêta (Author's Cataloguing in Publication Data)

Gerumanisutiku to hikaku bunmei : sôron = German studies and comparative civilization : an introduction 〈Japanese〉 / KISIDA Bansetu. // Ôtemae Zyosi Daigaku ronsyû = Journal of Otemae College. — Nisinomiya 〈Japan〉 : Ôtemae Zyosi Daigaku (Ôsaka : Dai Nippon Printing). — 26 cm. — ISSN 0285-9785. — 22 (Dec.1988), 142—165. — Abstract and notes in Japanese: p. 157—161. — Literature: p. 161—165 (Descriptions of all 38 items are based on the general framework of the ISBDs and the Guidelines for component parts. Japanese scripts are romanized.)

t1. [. . .] t2. [. . .] a1.[. . .] s1. IVG / Internationale Vereinigung für germanische Sprach- und Literaturwissenschaft s2. Kultur s3. Zivilisation s4. GOETHE, Johann Wolfgang von s5. Gedankenbibliographie / SCHNEIDER, Georg s6. MANN, Thomas s7. Methodischer Griff zur vergleichenden Zivilisationsforschung s8. Wirbel-Kern-Auge / whirl-core-eye ① [. . .] ② [. . .] . . .